文学館だより

令和 8年 1月 8日
若山牧水記念文学館
TEL 0982－68－9511
文責 日髙 第117号

＝若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year＝

皆さま、佳き年をお迎えのことと思います。
昨年は、牧水生誕140年記念事業をはじめ、多くの方々に
牧水のふるさとにお越しいただきました。
今年も生誕地ならではの発信をしてまいります。
どうぞよろしくお願いいたします。

1月の企画展 「第30回若山牧水賞」

期 日 1月9日（金）～2月28日（土）
会 場 若山牧水記念文学館企画展示室
受 賞 者 山中律雄（りつゆう） 氏
受賞歌集 『光圏』（こうけん）

昨年度、第29回若山牧水賞の展示風景

歌人山中律雄氏の第30回若山牧水賞受賞を記念した企画展を開催しています。中央ケースが山中さんコーナーです。現在は写真パネルと受賞歌集『光圏』、直筆自選五首を展示しており、来館された日に歌集にサインをいただき、色紙とともに展示します。

壁面には歴代受賞者が勢ぞろいし、直筆自選五首と受賞歌集、色紙が並んでいます。

総勢35名を数える若山牧水賞受賞歌人たち。年に一度、この時期でしか見ることのできない直筆自選五首を見に来られませんか。サイン入り歌集を手に取ってみませんか。

若山牧水全集（増進会出版社）より月報を紹介していきます

若山牧水全集全13巻・補巻（増進会出版社）にそれぞれ月報が付記されています。
その月報の一節ずつを今回から紹介していきます。ご存知の方もいらっしゃるとは思いますが、人が語る牧水像を追っていきたいと思います。…続きますように（心の声）…

第1巻月報（1992・10） 1 牧水歌碑と大悟法利雄 大岡 信

『みなかみ紀行』が若山牧水の紀行文中の白眉であることは、大方の意見の一致するところであろう。大正11年10月14日から28日まで、半月のあいだに、静岡県沼津の自宅から、長野県、群馬県、栃木県の主として温泉場をたずね歩きつつ、みちみち出会う川の水源、すなわち「みなかみ」に思いをはせ、さびしく苦しい山間の旅のひとときひとときに溢れるように歌を詠みながら、嘱目の光景や感懐をつづっていった、まことに面白い紀行である。

ずいぶん古い話になるが、私は1975年（昭和50年）10月19日から20日にかけて、『みなかみ紀行』ゆかりの草津温泉と花敷温泉に出かけ、牧水歌碑の除幕式に参列したことがある。牧水の高弟で牧水研究の第一人者である大悟法利雄氏からある日電話があり、除幕式の招きをいただいたためだった。なぜそんな招きをいただいたかといえば、私がその前年『今日も旅ゆく―若山牧水紀行』（平凡社「歴史と文学の旅」双書）という本を書いたからだったと思う。この本は今では中公文庫に『若山牧水―流浪する魂の歌』という題で入っているが、現代詩を書いている人間が牧水のことなどをなぜ書いたのかといえば、牧水は私にとって若いころから、いくつかの理由によって愛着ふかい歌人だったからである。

それに大悟法氏は、歌人である私の父親とも親しい方であり、私にも常々親父との会話などからその親しみが感染していたから、草津で講演せよという、私にとっては苦手な条件のついた旅だったが、いやおうなしに出かけることになってしまった。それに、紅葉もそろそろ始まっているはずだった。

「創作」社の全国大会をかねた行事だったので、200人前後の創作社友の人びとが、北海道から沖縄まで、各地から草津に集り、19日は講演、20日は『みなかみ紀行』の道すじに新たに作られた三つの歌碑の除幕式を、それぞれの場所で順々に行った。花敷温泉に一つ、六合（くに）村の六合小学校前に一つ、さらに暮坂峠―ここにはすでに牧水のりっぱな詩碑がある―を越えて中之条へくだってゆく途中の大岩に一つ、計三つの歌碑がこの日除幕された。10月20日という日は、牧水が半世紀前にこのコースを歩いた、ちょうど同じ日に当っていた。大悟法さんの人知れぬ苦心の計らいがそこにあった。

10月19日上野国吾妻郡花敷温泉といふに宿り翌朝出立す、

夜のほどにあたりの山に雪の降り積みたれば詠める
ひと夜寝てわがたち出づる山蔭の温泉（いでゆ）の村に雪降りにけり
これが花敷温泉の歌碑に刻まれた詞書と歌である。
この美しい名の温泉の朝はすがすがしかった。夜来の雨があがり、周囲の山塊は一夜のうちに目にみえて美しく色づき、火山灰の泥んこ道にさんさんと射す陽の光は、観光禍にまだ冒されていない村落のひなびたよさを称えていた。参列者の中に村の小学生、中学生が数十人先生に引率されてきていたのは、近ごろ都会では見られない光景で、私はふと少年時代の自分の姿をその中に見るような気がしておかしかった。
一行は次に、バスに分乗して六合小学校前へ移動した。公民館と小学校の接するところに
おもはぬに村ありて名のやさしかる小雨の里といふにぞありける
学校にもの読める声のなつかしさ身にしみとほる山里すぎて
この2首が刻まれている。村長はじめ村の要人が勢揃いしていて、碑に牧水の好きだった酒を注ぐなど、なかなか凝ったものだった。牧水嗣子、創作社主宰の若山旅人氏のあいさつが、私には教えられるところがあって興味深かった。旅人氏はこんなことをいった。
新しい碑には、刻んだ字の中に白いつめものがしてあるが、これは2，3年のうちに剥落してしまう。そうなっても、陽がさすと、おのずと刻んだ部分に影ができるので字が読めるものである。ところがこの碑は太陽に背をむけた向きに立っているので、明暗がくっきり出ないだろう。だから、村の方々にお願いしたいのは、ぜひ2，3年したらまた白いつめものをしてやって欲しいのです、と。
私は正直なところ歌碑とか詩碑にさして強い関心ももたずにきたが、こういう話をきくと、なるほどと思い、これは一つ勉強をしたなあと思う。旅人氏は建築家として多年すごして来られたから、こんな技術的な話にもその本領がおのずとにじむのである。
それにしても、牧水の歌碑というのは特別だ。大悟法氏のその時の話では、当時でさえ全国に70余の牧水歌碑があったということだから、その後も大悟法氏在世中に相当の数がふえただろう。今でもふえ続けているのではなかろうか。それは自然な成行きであるように思う。というのも、私の著書でも書いたとおり、牧水の多くの歌は、活字の森にとじこめられているよりも、海辺で松風に吹かれ、あるいは山間で小鳥の声に包まれている方が一層ふさわしいと感じさせるものをもっているからで、そういう歌人は近代歌人ではまことにまれであり、むしろ西行のような歌人を想起させるのだ。牧水の旅の歌には、自然が歌の中をやすらかに通り抜けているのが感じられ、私はその軽やかさが好きである。現在、自然と人間の関わり方が深刻に問われているとき、水源（みなかみ）を求めてやまなかった魂の旅人若山牧水が、あらためて人々によびかけてくるものをたくさん持っていると感じられるのは、ゆえなきことではない。（詩人）

次回は第1巻月報（1992・10）　2　牧水と沼津千本松原　　林　茂樹　を予定しています。

ぼっくん缶バッジ「坪谷の風景」が大きくなりました！

文学館で販売しているぼっくん缶バッジ。これまでどれも同じ38㎜の大きさでしたが、一番人気の「坪谷の風景」のみを57㎜にしました。

「坪谷の風景」	57㎜（写真上）	200円(税込)
「坪谷の風景」	38㎜（写真下左）	150円(税込)…残り6個限り
「虹」	38㎜（写真下中央）	150円(税込)
「青空」	38㎜（写真下右）	150円(税込)

お買い求めお待ちしております。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

七草の粥は真白し七草のななくさなづな青し七草
ななくさの　かゆはましろし　ななくさの　ななくさなづな　あおしななくさ

既に日常に戻っていらっしゃることと思いますが、七草がゆは召し上がられたでしょうか。

牧水は昭和2年、「七草粥」の歌を今回の歌と合わせて他に二首詠んでいます。

七草のなづなすずしろたたく音高く起れり七草けふは
めでたさを祝ひてたける御国振（みくにぶり）七草粥をいただきてたぶ

皆さんの今年一年の無病息災を願います。

参照『若山牧水全歌集　伊藤一彦編』

おことわり

冒頭掲載　**＝若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year＝**　は、今年度末まで掲載させていただきます。